

データと声で社会を動かす：埴岡健一さん

古瀬 敏（静岡文化芸術大学名誉教授）

あるべき姿を主張するのは運動家。
その主張を支えるのはデータやエビデンス。
その両者がうまく手を組むことができると、ものごとが進む可能性が高い。
医療ジャーナリストはその間をつなぐ役割を果たすのではないか？

その一つのありようを今回の講義は示しているように思う。
膨大なデータ、本来は書式などがきちんと揃った形で集成されているべきところが、公表されているものの、現実には形式が各所でめちゃめちゃ。
この実態は、我が国では珍しくない。それを多大な努力を払ってまとめて利用できるようにした作業、頭が下がる。

筆者は研究者であり、どちらかと言えばデータを生み出す側である。
ただ、現職を離れてフリーランスとなると、オリジナルでデータを生み出すのはなかなか厳しい。いや、それどころか、研究所を出てデザイン実践教育主体の大学に移ったときから、その点は苦労してきた。
ふつうの大学と異なって、卒業に当たってほとんどの学生は論文を選択しないので、努力して何らかの形でデータを生み出すということがない。

結果として筆者の論文はどちらかというところと確固としたデータに基づくわけではない、「あるべき姿論」という方向になった。つまり、運動家の側に軸足が寄ったわけである。

在籍していた研究所は建築研究所、もともとは建設省だったので、法規や政策につながるものを返していたが、筆者の専門は法規によって規制するのを遠慮していた部分、個人の自由にゆだねるべきで介入しないと一般に理解されていた部分であった（住宅の日常安全性と使い勝手―法規で規制できているのは構造安全と防火安全だけと言ってもいい）から、もともと仲立ちとなる性格が強かったが、ますますそういった側面が強くなったように思う。

残念ながら、論旨を補強するデータはなかなか構築しにくく、蠅螂の斧、隔靴搔痒、なんと言ったらいいか、内心忸怩たるところである。